

す。わかりやすく西洋紀元で申しますと、五九二年から七一〇年までが飛鳥時代、それから七八四年までが奈良時代でありますから、五九二年から七八四年に至る二百年に近い時期がいわゆる『飛鳥奈良時代』ということになります。この飛鳥時代百二十年をばさらに分けまして、天武天皇の時代を中心として、白鳳時代という名稱を立てる人もありまして、必ずしも一定しておらないのでありますが、ここでは、今申し述べました約二百年に近い時期をひつくるめて飛鳥・奈良時代と呼ぶことと御了承願つておきたいと存じます。推古天皇の御即位は、日本紀元の一五二二年に當り、飛鳥時代はこの年にはじまつたことになります。然しこの一二五二年は、歴史學の上の常識として、六百年ばかり縮めなければなりませんことは御承知の如くでありますから、この年は大體、神武天皇の御即位以來六百年位に相當すると考えてよいと思つてあります。

神武天皇の時以來ここに至るまでの間に、日本民族の文化は徐々に進んで來たことは申すまでもありませんが、しかしなお、さほど高い程度にまで進歩發展していたとは考えられません。ところが、この飛鳥朝のころからして、それが急速に發展したと思われるのでありますが、何故俄かにそんなに著しく進歩發展するに至つたかということについて考えてみましょう。

凡そ、ある民族の文化の進歩發展は、他の民族—従つて異種類の文化—との接觸によつて認められることで、異種類の文化との接觸がなければ、その文化の發展は認められないということは、古今東西の歴史を通觀した上に立てられた民族文化發達に關する鐵則とも言ひ得るものであります。日本民族の文化の著しい進展も、やはりこの他民族との接觸によつて認められることになつたのであります。